

指導資料

鹿児島県総合教育センター
令和4年10月発行

国語 第161号

対象 小学校 義務教育学校
校種 特別支援学校



目的思考で考える国語の授業の作り方

－もう一度振り返る授業づくりの基本－

- ◆ 国語科においては、目的思考による授業づくりが特に有効である。
- ◆ 授業づくりでは、「学習目標」を中心に据え置き、「学習内容」や「学習方法」を吟味する必要がある。

#国語科指導 #目的思考による授業づくり

1 はじめに

GIGA スクール構想がスタートして二年。学校では1人1台端末をいかに活用するか、試行錯誤が繰り返されていることだと思う。しかし、ICTを何のために使うのか、目的と手段が混沌とする授業に頭を悩まされている先生も多いようである。折しも、指導資料国語第156号（上二次元コード参照）では、各学校のICT活用の例を紹介するとともに、ICTを活用することが目的にならないように警鐘を鳴らした。



本資料では国語科の目的である、国語科において育成を目指す資質・能力を児童に身に付けさせるための授業の作り方について、三つのステップで振り返っていく。

2 授業づくりの流れ

授業とは児童が学習する場である。鹿児島県教育委員会発行の「令和4年度教職員のための研修の手引」にも記載されているが、授業を構成する要素は古来「児童」、「教材」、「教師」と言われている（図1）。

しかし、これらをただ単に授業に含めただけでは、なかなかうまくいかない。それは、

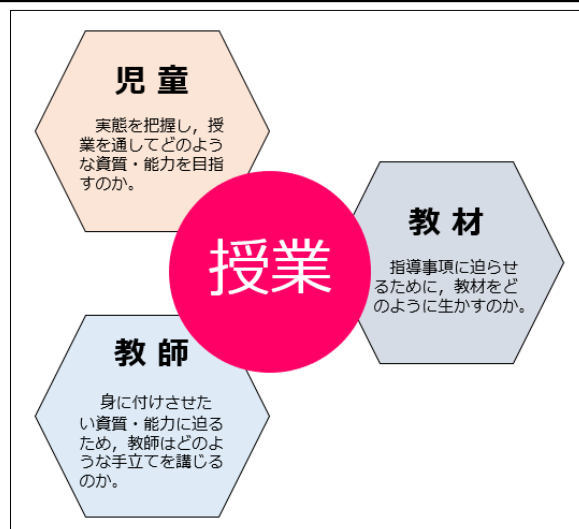


図1 授業の3要素

「児童」、「教材」、「教師」それぞれの要素が有機的につながり、組み合わせられていないからである。大事なことは「何のための授業なのか」という目的を明確にして組み合わせることである。目的を考慮せず、これらを組み合わせただけの授業では児童の学びはただの作業と成り下がってしまう。意見文を書いただけの「活動だけで学びのない」授業、どうしてこの教材を読むのか分からない「学ぶ必要感が味わうことができない授業」など、国語科の授業において傾向は強いと言える。

そのため、目的思考（物事の成果を決める最大の要因は目的だということから、それを第一に考える思考方法）で、先の三つの要

素を「学習目標」、「学習内容」、「学習方法」の三つの階層に整理することで、目的に迫る授業につながっていくのである(図2)。

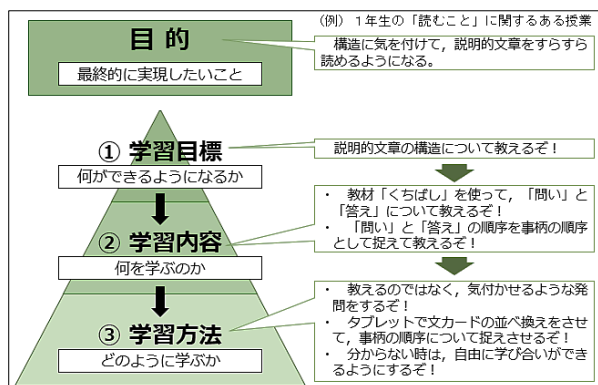


図2 目的思考による授業づくりのイメージ

授業を構想する際、教師は様々な事象を想定する。まず、先の「児童」、「教材」、「教師」の中の各事象が、「学習目標」、「学習内容」、「学習方法」の中のどの階層に属する事象なのか把握することが大切である。その上で、教師が講じる手立てレベルの「学習方法」からではなく、目的に迫るために学習目標「何ができるようになるか」を第一義に考え、学習内容「何を学ぶか」と学習方法「どのように学ぶか」をつなげて考えるようなステップで授業づくりを進めることで、目標に迫る教師の手立てとなる「学習方法」が研ぎすまれていくのである。

第2学年の教材「たんぽぽのちえ」を基にした授業づくりを例に具体的に説明する。

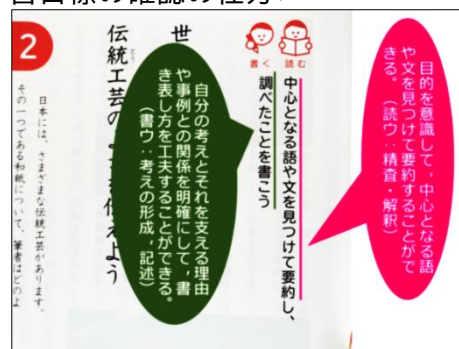
① 学習目標「何ができるようになるか」

学習目標を確認するということは、本単元や本時で児童に最も身に付けさせたい資質・能力を確認するということである。私たち教師は、「書く力を身に付けさせたい。」「すらすら読めるようになってほしい。」等といった思いから、1単位時間の国語の授業に多くの活動内容を詰め込みすぎてしまいがちである。その結果、時間内に終わらない授業、児童が何を学んだか分かりにくい授業になってしまうことが多い。

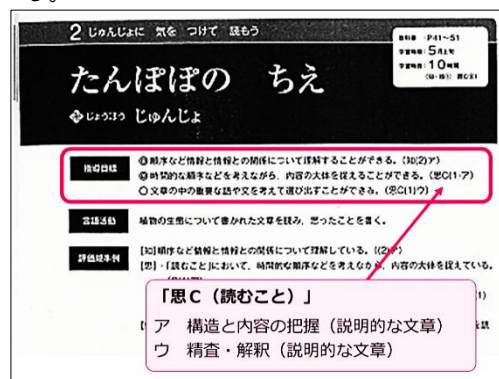
そこで、あれこれ欲張らずに学習目標「何

ができるようになるのか」をたった一つに限定することで目的に迫りやすくなる。授業づくりでは終始学習目標を中心に据え置き、学習内容や方法を吟味する必要がある。つまり、授業づくりの三つの階層の中で一番大事なものであり、授業づくりの要であるといっても過言ではない。

<学習目標の確認の仕方>



教材名を確認することが、学習目標確認の第一歩である。教科書の単元名は、本単元で身に付けさせたい資質・能力が明記されていることが多い。また、「見とおしをもとう」には、児童目線で、本単元で身に付けたい資質・能力が明記されている。



指導書も有効活用する。単元を作成するに当たり、どのような意図で目標設定しているかが解説されている。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
構造と内容の把握	ア 時間的な順序や事例の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。	イ 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。	エ 事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。
文章のなかの重要な語や文を考えて選り出すこと。	イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。	イ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。	イ 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。
目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。	ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選り出すこと。	ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。	ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。

「思C（読むこと）」

- ア 構造と内容の把握（説明的な文章）
- ウ 精査・解釈（説明的な文章）

これらを、学習指導要領の指導事項の解説と併せて見ることで、本単元で重点的に身に付けさせたい資質・能力、いわゆる学習目標が明らかになる。

② 学習内容「何を学ぶか」

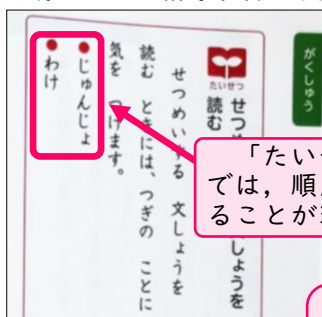
明らかにした目標に迫るために、次の三つの視点から、児童が具体的にどのようなことに着目して学ぶのか考える。その際、児童の実態を踏まえて考える必要がある。

○ 指導事項の深い分析

学習指導要領における国語科の学習用語の定義や方法が抽象的であり、児童の実態に即した授業が実現しにくい。そのため、教師は学習指導要領解説や教科書、指導書等を用いて、それらを深く理解した上でどのように児童の言葉で捉えさせるかを考える必要がある。

<指導事項の分析の仕方>

教科書の「見とおしをもとう」や「たいせつ」などを参考に、分析する。これらを参照することで、指導事項を「どのような考えなのか」、「どのような言葉を使って理解させるか」等、児童の目線に立って指導事項を分析することができる。



「たいせつ」から、本単元では、順序に着目して学習することが理解できる。



「見とおしをもとう」から、順序は時間の順序であり、「春になると」や「やがて」など、文頭の後に着目して読むことが手掛かりとなることが分かる。

○ 教材の深い分析

領域によってまちまちであるが、次のような視点で教材を分析する。

- ・ 段落構成や各段落の要点等、どのような文章構成になっているか。
- ・ 指導事項とどのようにつながっているのか。

<教材分析の仕方>

指導書には、教材文の特徴や構成などについて、詳細に述べられている。指導事項とつなげて、どのように教材を活用して指導するか考えてい。

●教材文の特徴
「たんぽぽのちえ」は、たんぽぽの花が咲いてから綿毛となって種を飛ばすまでの過程を、時間的な順序に沿って、様子、理由に分けて説明している。たんぽぽの様子（具体的な事柄）と理由（抽象的な事柄）とを読み分け、事柄の論理を考えるのにふさわしい構成となっている。
「春になると」で一定の時期を示し、「二、三日たつ」と「やがて」で時間的な経過を示して、花から綿毛への変化を述べている。「このころになると」は、綿毛のできた同時期ごろを示している。「よく晴れて、風のある日には」と「しめり気の多い日や、雨ふりの日には」は対比的に述べられ、天候による綿毛の様子の違いを示している。最後は「このように」で全体をまとめている。

時間的な順序

「春になると」「二、三日たつと」、「やがて」、など

●教材文の構造

終わり	中								初め	場
まとめ	知恵(4)		知恵(3)		知恵(2)		知恵(1)		話題	提示
⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	段落
四つのはなを飛ばして	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が	たんぽぽの綿毛が

○ 児童の具体的な実態把握

児童の学習内容に関する実態を把握するために、診断的評価・分析を行う。その際、アンケートによる印象調査、意識調査も必要だが、本単元で身に付ける力が、現時点でどの程度身に付いているかについて調査することが重要である。

これらの分析を整理し、児童が本授業で「何を学ぶのか」を明確にした上で、次の三点について構想する。

- ・ 身に付ける資質・能力を効果的に学ぶことができるように、単元を通して取り組む言語活動を設定する。
- ・ 単元計画を作成する。
- ・ 単元計画を基に、1単位時間それぞれの授業計画を作成する。

その際、教師ではなく児童目線でシンプルに構想するのが望ましい。

③ 学習方法「どのように学ぶか」

最後に学習方法を考える。学習方法とは、授業における教師の手立てである。具体的には、発問、板書の工夫、ワークシート、思考ツール、グループなどの学習形態など、授業におけるありとあらゆる手立てを指す。つまり、学習目的が一つ、学習内容が数個であるのに対し、学習方法は何万、何千種類もあり得るのである。数多の方法から、学習目標・内容によりよく迫るものを、児童の実態を考慮して選定することが肝要である。

この時、手段の一つとして ICT も候補に挙げ、他の方法と比較して効果が大きい場合導入すればよいと考える。

つまり、ICT はあくまで手段の一つであり、ICT の活用ありきで授業づくりを行うことで授業本来の目的がぶれてしまう。その結果、国語の資質・能力を培う授業にならないのである。

< ICT の活用例 >

効果◎「話すこと・聞くこと」



インタビューの仕方について学習する場合、タブレット PC のレコーディング機能を活用すれば、学習の変容をモニタリングすることができる。

効果◎「書くこと（引用）」



自分の考えをよりよく伝える意見文等を書くために、図や表などの資料を挿入する場合がある。資料を集める際、ブラウザの検索機能を使えば、容易に必要な資料を集めることができる。

効果▲「読むこと（文学的な文章）」



想像を広げて読むことを身に付けさせたい場合、安易に検索機能を使えば、児童の考えが固定化してしまう場合がある。学習内容や活動に応じて、ICT 活用の是非を判断したい。

3 おわりに

目的思考による国語科の授業づくりについて振り返ってきた。近年、学校では効果的な ICT 活用を考えることが多いが、結果的にこれまでの国語教育で長年大事にされてきた授業づくりの基本について振り返ることが重要であるということが言える。これは、どんなに時代や社会が変化して、ICT に代表されるような児童の学びを支える学習方法が変わってきても、国語の力を身に付けさせる授業づくりは全く変わらないし、変わってはいけないということである。本資料で振り返った国語の授業づくりの流れを土台に、常にアンテナを高く立てて、その出番を待つ多くの手段を仕入れておくことができる教師の姿が、令和時代に求められる理想の教師像なのではなかろうか。

ー 主な参考・引用文献 ー

- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編』2017
- 工藤勇一『学校の「当たり前」をやめた。』2018, 時事通信社
- 『小学校国語一～六』2019, 光村図書出版
- Web ページ『国語をもっと面白く!』
<https://kokugo-omoshiroku.com> 2022 8 月閲覧
- 鹿児島県教育委員会『令和 4 年度教職員のための研修の手引』2022
- 鹿児島県総合教育センター『指導資料 国語 第 156 号』2022

（教科教育研修課 石川 雅仁）

※ 本資料は、UD フォントを使用しています。